

## こどもとむしの会における「いどうこんちゅうかん」

吉岡 朋子<sup>1)</sup>

NPO 法人こどもとむしの会のなかで「いどうこんちゅうかん」がどのように生まれ、はじまり、今に至るのか。その起源と 10 年間についてお話ししましょう。

### 【はじまり】

2009 年 4 月にめでたく開館した佐用町昆虫館は、その 3 か月ちょっと後の 8 月に台風 9 号に見舞われ土砂が流れ込み、休館してしまいます。昆虫館に遊びに来てもらうことができなくなったのです。そこで八木剛さん(こどもとむしの会事務局/兵庫県立人と自然の博物館主任研究員)によって考え出されたのが「いどうこんちゅうかん」でした。佐用町内の保育園・幼稚園へ生きた虫や標本を持って行って、子どもたちにさわってもらおうというものでした。

原型は、同年 8 月にひらかれた人と自然の博物館の事業の「神戸元町・夏の昆虫館」だそうです。内容は、おきなむしかご(カヤ)・さわってみよう(生き虫)・おえかき&ぬりえ・パネル展示。現在とほとんど同じです。元町昆虫館でノウハウを蓄積し、効果を実感した八木さんは、これを「いどうこんちゅうかん」として 10 月に佐用町内で実施しようと思ったそうです(写真 1、2)。

### 【神戸市児童館派遣事業】

NPO 法人こどもとむしの会創設の少し前になんとなく神戸市内の児童館の職員になった私は、長い夏休みの

朝から夕方までを児童館で延々と過ごす学童保育の子どもたちのために、「むし」のおたのしみイベントをひらくことができないかと考えていました。「夏」といえば「虫」です!でも、どんなものかイメージを説明しても児童館の先生方には理解してもらえず 3 年が過ぎてしまいました。

2010 年 6 月に恩師である内藤親彦先生(こどもとむしの会理事長)にお会いした際に、「大学の学生さんたちに、児童館に虫を連れて来てはもらえないでしょうか?」とお願いしたところ「八木さんがやっていますよ」といいお返事いただき、さっそくその年の 8 月、勤め先の神戸市立桃山台児童館で「いどうこんちゅうかん」を開催していただきました。内藤先生も来てくださり、子どもたちに「むしのおはなし」をしていただきました。子どもたちのよろこんだこと!目をキラキラさせて「先生、見て!見て!」と虫やイモリを誇らしげに見せてくれました。どの子にとっても、いきものがたくさん児童館にやってきて、いっぱいさわられる、というのは初めての経験だったのです。

学童保育に来る子どもたちの中には、親が忙しくて昆虫館はもちろん博物館や美術館に連れて行ってもらったことがない子もいます。そういう子どもたちにこそ、こういったサービスは提供されるべきです。なぜ、こんな楽しくすばらしいことを神戸市や兵庫県は児童館でやってくれないのかな?と思い、八木さんに神戸市内の



写真 1 いどうこんちゅうかん(マリア幼稚園 2009 年)



写真 2 いどうこんちゅうかん(三河保育園 2009 年)

<sup>1)</sup> Tomoko YOSHIOKA NPO 法人こどもとむしの会

ほかの児童館でもやってくれないかとお願いしたのです。そこでいただいた返事が「やりたいなら自分で」でした。「え？私が？」です。私はサービスを受ける側の人間のはずです。

でも「いどうこんちゅうかん」の魅力が「え？」を超えました。大学では昆虫学を専攻していましたが、研究者の先生方や虫屋さんのみなさんのようには虫のことを知りません。でも、偶然にも児童館で働いていた私は「こどもとむし」の『と』にはなれそうな気がしたのです。

八木さんと清水文美さん、桃山台児童館の牟田耕起館長に、こべっこランド（神戸市総合児童センター）に掛け合っただき、神戸市児童館派遣事業なるもののメニューに「いどうこんちゅうかん」を入れていただきました。児童館派遣事業とは、こべっこランドの委託を受け各児童館に各種おたのしみプログラムを実施する事業です。経費は各児童館ではなく、こべっこランド持ちです。毎年メニューに上がるので「いどうこんちゅうかんをしてみませんか？」と営業をかける必要がなく、児童館側からこべっこランドをとおしてオファーがかかる仕組みです。

晴れてこどもとむしの会の正会員になった私は、理事のみなさまに恥ずかしげもなく『神戸市内の児童館での「いどうこんちゅうかん」の安定した実施が目標です！』と自己紹介メールしたことを覚えています。自分でハードルを上げておかないとこんなことはできないと思ったのです。

そして2011年8月、神戸市内で初めての「いどうこんちゅうかん」を4児童館で開催しました。雰囲気づくりや昆虫の説明にも使える大きな「昆虫タペストリー」もこのとき作っていただきました。メンバーは、むしむし大博士（内藤先生）・むしむし博士（テネラル/大学生）・むしのおばちゃん（清水文美さんと私）です。どの児童館でも、こどもたちは大喜びの大成功。初めてにもかかわらず、4つの枠に75の児童館が応募するという高倍率だったと聞きました。今でもその人気は続い

ていて「なかなか当たらない」と言われます。3年目からは夏休み中に6児童館で実施することになりました。

この8年間で神戸市内の46の児童館やコーナー（小学校内にある学童保育施設）へ派遣事業で行きました。近隣の児童館との合同開催などもあり、56の児童館とコーナーの子どもたちが「いどうこんちゅうかん」を体験しました。参加した小学生は2067人・幼児322人・大人43人・児童館スタッフ378人。合計2810人がむしむしな体験をしてくれたこととなります。（写真3、4）

### 【こども☆ひかりプロジェクト】

2011年3月11日に東日本大震災が起きました。清水文美さんが「東北の子どもたちのために何かできないかな？」と言い、7月にはひとく Kids キャラバンが仙台を訪れました。その後、清水さんは八木さんとともに全国の博物館・美術館の学芸員に呼びかけて、被災地の子どもたちを応援する「こども☆ひかりプロジェクト」を立ち上げました。そして翌2012年7月、私たちこどもとむしの会の「いどうこんちゅうかん」もこのプロジェクトに参加し仙台・福島を訪れることとなります。明石市立文化博物館におられた一井弘之さんと大学生3人（森野光太郎・前田慧・前田慈）と私の5人が「東北いどうこんちゅうかん」メンバーでした。

何もかも初めてのことだし、九州国立博物館や日本科学未来館のアクアマリン福島ような大きなところのプロの学芸員のみなさんと同列で、小さなNPOの私たちに何ができるのか、見劣りがしないのかととても不安でしたが、当たって砕けろ！することは決まっています。ありがたいことにどこへ行っても「むしさん」は大人気！仙台市科学館の「むしブース」の前はずっと満員電車のような熱気で、何百回も同じ言葉を子どもたちにかけて声は潤れながらもハイテンションな2日間を過ごしました。「いどうこんちゅうかん」の質の高さも実感し、自信もつきました。



写真3 いどうこんちゅうかん（小東山児童館 2011年）



写真4 いどうこんちゅうかん（竹の台児童館 2012年）





写真5 第1回こどもひかりフェスティバル(仙台市科学館2012年)



写真6 ミュージアムキッズ全国フェアチラシ(仙台市卸町2016年)



写真7 ミュージアムキッズ全国フェア(京都みやこめっせ2018年)

飛行機の窓から見た被災地の沿岸地域は津波に奪い去られ、神戸の地震で「これで死ぬのかな?」と思った私にも理解の範囲を超えたものでした。しかし、虫と遊ぶ子どもたちの無邪気さは神戸の子どもたちと変わらず、「いどうこんちゅうかん」を目いっぱい楽しんでくれている様子には心が和みました。

その後、仙台・福島・盛岡・田村市(福島県)・南相馬・一戸(いわて子どもの森)・棚倉町(福島県)などを「こども☆ひかりフェスティバル」で訪れました。2016年の仙台での「ミュージアム・キッズ全国フェア」は2日間で6300人の来場者が訪れるというビッグイベントになり、2017年には熊本へ。昨年は被災地ではない京都のみやこめっせで開かれ、50近くのミュージアムが全国から集まりました。私たちは箕面・橿原・伊丹・佐用の昆虫館連合で参加。3つのカヤを張りました。2日間で9000人近い来場者。私たちの「スーパーむしむしたいけん」にも約3000人(2日間)が来て楽しんでくれました。それまでは被災地を訪れていた「こども☆ひかり」ですが、これからの道が見えたような気がしました。2020年は北海道が決まっています。

美術系や歴史系、民俗系、自然系など多くのミュ

ジムのブースを見せてもらうことで刺激とアイデアをもらいます。プロの姿勢も参考になりました。「いどうこんちゅうかん」も、基本は変わりませんが工夫を重ねました。状況によって足し算・引き算を臨機応変にすることも学びました。また、「考えこまずにやってみる」大切さを感じました。

テネラル(大学生)の学生たちも、東北の被災地を肌で感じるという大きな体験をすることができました。津波で何もかも流された荒浜の海岸を見てきた小林慧人くんの「行ってよかった。」というつぶやきが多いのことを物語っています(写真5、6、7)。

### 【キーワードはさわる!】【むしさんとなかよし!】

思いがけず東北まで行くことになった「いどうこんちゅうかん」ですが、2015年には県内の依頼(しあわせの村・おおやアート村BIG LABO・ひようご環境体験館など)も増えて、2017年の夏の最盛期にはスタッフのやりくりに困るような状況になってきました。

「いどうこんちゅうかん」のはじめに「今日は、むしさんをよく観察して、なにかひとつ、むしさんのひみつを発見してください。そして、むしさんとなかよしになってください。」と子どもたちに伝えます。虫が苦手な子どもも、少しずつさわれるようになります。そして、自分なりに「なにか」を「発見」すると、ひとみがきらきらと大きく見開かれ、ちょっと息がとまるような。そんな瞬間が子どもにやって来ます。「好奇心の種をゴクリと飲みこんだ瞬間」だと私は思うのですが、そんな瞬間に立ち会えるのも「いどうこんちゅうかん」のスタッフ特権だと思います。そのあとに子どもたちの「見て!見て!」がはじまり、一生懸命自分の発見を説明してくれるのです。それぞれの子にいろいろ感じてほしいので、子どもたちにはできるだけ何も教えないよう、ところがけています。「ほんものたいけん」することで、子どもたちの好奇心の芽がすくすく育ってくれたらうれしいです。



写真8 アゲハ (桃山台児童館 2015年)



写真9 オオシモフリスズメ (神大附属小 2018年)



写真10 むしむし小話 (松風児童館 2018年)



写真11 むしむし小話 (神戸市立魚崎児童館 2016年)

児童館の子どもたちから時々「お礼状」が届きますが、それは子どもたちのたくさんの「はっけん」であふれています。「へらくれずをさわったよ!」「たがめをはじめてさわられてうれしかったよ!」「おもってたよりざらざらしてたよ」「毛がいっぱいはえててきもちよかったよ」とこんな感じ。思っていた以上に「さわる」という表現が多いことに驚かされます。子どもたちには、「見た」ことよりも感触の記憶が強いのですね。「それなら、もっと虫をさわらまくってもらおうよ!」と「生き虫」の充実を心掛けるようになりました。2~3歳児にも安心してさわってもらう工夫も必要です。苦手な子には小さな虫からはじめて少しずつ慣れてもらいます。チビクワガタは、そんな子どもたちには人気者。小さくてもクワガタなので手に乗せることができた時にはとてもうれしそうな表情を見せてくれます。「さわれた」ことで大きな満足と自信を持つのです。

虫が苦手な子どもたちには、おながやわらかいアカライモリが大人気です。イモリは昆虫ではありませんが、私たち脊椎動物の代表として毎回連れて行きます。「いどうこんちゅうかん」のアイドルでもあります。

最近は「いもむし」ブーム! 10cmもあるパンパン

に太ったオオシモフリスズメの幼虫を、最初は「キモ〜!」と言ってさわらなかった子が「かわいい。かわいい。」とさわられるようになるのです。顔を覚えると仲よくなれるのは、人もいもむしも一緒ですね。(写真8、9)

#### 【あこがれのおにいちゃん・おねえちゃん】

「いどうこんちゅうかん」に欠かせないのがテネラルの大学生です。彼らは人と自然の博物館の八木さんの昆虫プログラムに小学生のころから参加していて、若いけれど豊富な経験と知識を持っています。子どもたちは、少しでも年齢の近い彼らに興味津々。虫だけでなくおにいちゃんたちも観察されてます。「いっぱい勉強したら、あんなかっよくなれる?」と聞いてくるのです。

テレビや本や図鑑でやたらものしりな子どもたちが多いこの頃ですが、実は「ほんもの」の虫をさわったことがなかったりします。そんな子どもたちにおおウケなのが、テネラルメンバーによる『むしむし小話』です。体の構造・擬態・変態・蝶と蛾のちがい・口の形とたべもの・単眼と複眼・ハチの話・・・とこれまでたくさんの小話をしてくれました。大人に教わるのちがって、「かっこいい」学生たちの話は子どもたちにずっと入っ



ていくのでしょう。

そしてなによりもまず、彼ら彼女たちはとてもやさしいのです (写真 10、11)。

### 【むしのおえかき】【むしむしキャンプ】

2013年11月。近藤伸一さんが昆虫館でなさっておられるお絵かきを、『むしのおえかき大会』として神戸市立桃山台児童館でおためし開催させていただきました。標本を箱から出して360度いろんな方向から観察し、スケッチしようという冬期のプログラムです。

子どもたちには「よ〜く観察して大きく描いてね!」とだけ伝えます。白い画用紙とクレヨン。そして標本箱の中から好きな虫を選ぶ。それだけですが、色とりどりの虫がどんどん画用紙の上に生まれてきます。子どもたちは彼らが見たままを描いていきます。その虫の一番気になった部分が大きく強調されて描かれることがあります。それはその虫の一番の特徴であり、彼らの目はそれを見過ごすことはないのです。彼らには描いたとおり見えるのかもしれませんが。近藤さんがおっしゃるように子どもたちは「天才画家の集団」でありますし「観察者としても一流」なのです。

午前中に絵を描き、午後は描いた虫をハサミで切り取り、大きなロール紙に貼り付けて『みんなのおおきな絵』を仕上げます。児童館の壁に貼り付けると、大きなむしの壁画ができあがります。「むしのおえかき」は私の大好きなプログラムです。のびのびと描かれた「むし」たちを見ると、とてもしあわせな気持ちになります (写真 12、13、14)。

「むしむしキャンプ」も楽しいプログラムです。2015年、国立淡路青少年交流の家から一泊の親子キャンプの中の『虫とり名人になろう!』という4時間の企画をいただきました。大学生3人と私の4人で行きましたが、参加家族の親御さんたちに学生たちが大評判で、翌年も呼んでいただきました。そして3年目の2017年には『むしむしキャンプ』として虫採りだけのキャンプとなります。32家族109人(こども56人)が、それぞれの家族のペースで、ゆっくり虫採りをし、夜はナイトー、翌日は採った虫のおえかきをしました。4年連続で参加しているご家族もいて、これからも続けていければと思っています (写真 15)。



写真 12 むしのおえかき (桃山台児童館 2018年)



写真 13 むしのおえかき (桃山台児童館 2018年)



写真 14 むしのおえかき (2016年神出児童館)



写真 15 むしむしキャンプ (国立淡路青少年交流の家 2018年)

【そして、また佐用へ】

2017年、佐用町内の幼稚園・保育園で「いどうこんちゅうかん」を復活させよう！という久保弘幸さんの提案で、「おためし・おしかけ」ではありましたが、6月29日に三河保育園と南光保育園での開催が実現しました。佐用町内の子どもたちに何かお返しがあったのです。未就学の子どもたち向けに近藤さんが「むしのかみしばい」を作ってください、野村智範さんの水の生き物（オタマジャクシ・イモリ・カエル・カメなど）コーナーなどが佐用バージョンです。そこに斎藤泰彦さんと茂見節子さんと私が加わったシニア隊です。午前・午後と2園まわるので、午後のお昼寝との兼ね合いが気になりましたが、保育園もよろこんで受け入れてくださいました。佐用町内には、6つの保育園と幼稚園が一つ。計7園を春と秋にまわって、昨年秋に2順目に入りました。

はじめのあいさつ・諸注意のあと、近藤さんのゆかいな『むしのかみしばい』ではじまります。そして子どもたちが自由に虫を楽しむ『むしむしタイム』。生き虫コーナー・みんなのおっきな虫かご（カヤ）・水のいきもの・虫のぬりえです。最後は久保さんの『むしむし大博士の質問コーナー』。子どもたちからたくさんの質問と感想が飛び出します。3歳児さんたちも「むしさん」をさわってくれました（写真16～23）。

2009年の水害当時三河保育園に勤めておられた諏訪先生（現・上月保育園長）が、昨年の「いどうこんちゅうかん」終了後、お菓子箱を大切に持って来られました。中身は、木の実や葉っぱ・紙粘土で作った『むし』の標本でした。水害直後の「いどうこんちゅうかん」がとても楽しくて、子どもたちと保育園の先生とで「こんちゅうかんごっこ」をして作ったいろいろな思いのこもった『むし』たちでした。10年前に八木さんが蒔かれた種が佐用の人たちによってこんな風に大事に残されていたのかと、ちょっと感動。涙が出そうになりました（写真24）。

【ありがとう】

思いがけなく「いどうこんちゅうかん」を始めることになった私ですが、八木さんをはじめこどもとむしの会のみなさまやテネラルの学生たちに出会えたのはとても幸せなことでした。竹田先生や河村さんからは大きなエールをいただき支えていただきました。これからもみんなと一緒に続けていければと願っております。

勤めていた神戸市桃山台児童館では、いろいろ試させていただきました。今も「いどうこんちゅうかん」（9年連続）と「むしのおえかき」（6年連続）の依頼をい



写真16 むしのかみしばい（利神保育園 2018年）



写真17 生き虫コーナー（三日月保育園 2018年）



写真18 みんなのおっきなむしかご（佐用保育園 2017年）



写真19 カヤ虫（マリア幼稚園 2017年）





写真 20 カヤの中 (南光保育園 2018 年)



写真 21 水のいきもの (上月保育園 2018 年)



写真 22 めいえコーナー (マリア幼稚園 2017 年)



写真 23 質問コーナー (三河保育園 2017 年)



写真 24 昆虫館ごっこ (三河保育園 2009 年)



写真 25 むしむしスタッフ (京都みやこめっせ 2018 年)

ただいています。お世話になってばかりですが、多くのことを学ばせていただき、継続して開催することのおもしろさ・大事さも教えていただきました。牟田館長をはじめ桃山台児童館の先生方に感謝しております。

なかなか佐用町昆虫館まで足を延ばせていなかった私でしたが、2017年の佐用での「いどうこんちゅうかん」開催をとおして、保育園・幼稚園の先生方とお話しさせていただくうちに、佐用への愛着も感じてきました。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

NPO 法人こどもとむしの会も 10 周年を迎えました。昆虫館も、昨年きれいにリニューアルされました。新しいメンバーにもどんどん加わってもらい、昆虫館の運営や「いどうこんちゅうかん」など外のイベント開催も続けて、こどもとむしの会を盛り上げていけたらと思っています (写真 25)。